

論文審査の結果の要旨および担当者

| | | | | |
|------|---|---|---|---|
| 報告番号 | ※ | 甲 | 第 | 号 |
|------|---|---|---|---|

氏 名 徳永晴策

論 文 題 目

The Relationship between Temporal Changes in Proximal Neck Angulation and Stent-Graft Migration after Endovascular Abdominal Aortic Aneurysm Repair

(腹部大動脈瘤に対するステントグラフト内挿術術後における
中枢ネック角の経時的変化と migration との関係)

論文審査担当者

名古屋大学教授

主 査 委員

碓氷章孝 

名古屋大学教授

委員

長縄恒之 


名古屋大学教授

委員

室原豊明 

名古屋大学教授

指導教授

古森公浩 

論文審査の結果の要旨

別紙1-2

今回、腹部大動脈瘤に対するステントグラフト内挿術（EVAR）術後の中枢ネック角の経時的変化と留置されたステント中枢位置のmigrationとの関係を検討した。EVAR術前、術直後、1年後、2年後の造影CTを使用しmigration長、およびネック角を測定し、観察期間中に使用されている代表的な2機種について検討を行った。術前から術直後にかけての角度変化は有意差を認めたが、術直後以降では有意な角度変化が認められなかった。ネック角の角度変化と中枢migrationとは明らかな相関関係は認めなかった。また同様に術後2年の観察期間内での追加治療の有無と術後2年時でのendoleakに関しても、ネック角の角度変化とは明らかな相関関係は認められなかった。また、デバイスによっても有意差は認めなかった。

本研究に対して以下の議論を行った。

1. 術前の角度が大きいほどその後の変化が大きくなる可能性について、術前の角度が今回の測定方法で45度以上のものに対して追加検討を行ったが、統計学的有意差を認めなかった。術前、術直後で最も変化が大きくなるのは同様の結果であるが、その変化値、角度の差については、術前の角度の大きい群と小さい群で有意差を認めなかった。
2. 術後の瘤径の変化とmigrationについては、測定誤差3mmの範囲にとどまるものが今回は多かったためか、特に術後における瘤の縮小との関連は見出せなかった。
3. 末梢の角度の変化については今回の測定方法を統一して適用すると、migrationとEndoleakの関連については報告があるものの、今研究では有意差を認めず、末梢の角度変化とEndoleakに関しては相関を認めなかった。
4. 今回検討した機種は、観察期間中に使用されていた代表的なデバイスであり、ステントの構造の違いから、追従性の良い柔らかいデバイスと固いデバイスとして比較検討されることが多く報告も散見される。今研究が角度変化を主要な検討項目としているために、ネックの固さが異なるとされる今回の機種を選択し、デバイス間の検討を行った。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

| | | | | |
|-------|------|----------------|----|------|
| 報告番号 | ※甲第 | 号 | 氏名 | 徳永晴策 |
| 試験担当者 | 主査 | 碓氷章彦 長尾拓也 室原豊明 | | |
| | 指導教授 | 古森公治 | | |

(試験の結果の要旨)

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1. 術前の角度の程度と術後変化量の相関について
2. 瘤の縮小とmigrationとの関係について
3. 末梢の角度がより大きくなることでEndoleakが出現している可能性について
4. 今回検討された二機種を選択した理由について

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、血管外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。